

## バトン～私の子供と仲間達

この文章は私の長男が小学校を卒業したときに書いたものですが、  
私の思い込みがかなり入っていますので正確ではありません。

私事で恐縮ですが、私の長男は、この春、中学生になります。まだ会話による意思疎通はほとんどできませんが、最近になって3語文がわずかながら出るようになりました。理浩はダウン症候群に起因する発達遅滞児です。ここでは彼の小学校生活を通して垣間見た、彼と彼の仲間達の関係についてお話したいと思います。

小学校では、彼は親学級と呼ばれる普通学級に在籍しながら、通常は小人数学級で授業を受けていました。この方式で彼が普通学級の同級生からどう見られるか少し心配だったのですが、先生方の細かな配慮もあって、親学級の児童達は彼を好意的に迎えてくれるように見えました。しかし、彼は1・2年生の頃は結構荒れていました。

彼の行動は、他の児童の目には問題行動として映るものが多いため、彼と積極的に関わろうとする児童は、どうしても彼の行動を規制しがちになります。彼はこれを過干渉だと感じていました。さらに、彼はそのストレスを溜め込み、時間を置いて爆発させましたから、周囲は理浩の問題行動の原因がわかりません。このため彼は問題児と見なされ、更に規制が強まると言う循環が起っていました。

しかしこの問題も、2年生の後半くらいから徐々に収まっていきました。これは彼自身が学校に慣れたこともありますが、最も影響したのは、2年生から親学級で同じクラスになった一人の少年だったと考えています。この少年は彼を観察してから対応の仕方を考えていました。自分の価値観で彼を規制するのではなく、彼の行動が何を表しているのかを知ろうとしたのです。彼自身もこのことを感じ取ったようで、この少年を自分の最も良き理解者だと認めているようでした。

そして、次第に他の児童も彼に対してこの少年と同じような対応を見せるようになっていきました。そうしたある日、彼がいつものように急に怒り出したときに、周囲にいた何人かの児童が集まって「お、まあくんが怒っとるぞ、なんでやなんでや」と、その原因について議論を始めたのです。これは驚きでした。

彼は言語によるコミュニケーションができませんから、非常に理解しづらい存在ではあります。このため1・2年生の頃は、周囲の児童は自分達の意図が通じない彼を持て余しているように見えました。それが時間が経つにつれ、「違う」ということを認めた上で、それを越えたところで仲間としてつながっていかうとする姿に変わっていきました。

彼が5年生のとき、運動会でリレーに出場しました。彼は速く走ることができないため、コースの途中からスタートすることになったのですが、逆に彼はそのことでへこんでしまいました。そこで6年生の運動会では、彼はリレーの全コースを走ることになりました。予想通り彼はどんどん追い抜かれて行きました。もう前を走るチームには追い付けそうにありません。それでも、彼からバトンを渡された少年達はみな全力で走っていました。

結局、彼が属していたチームはビリになってしまいました。このときチームの他のメンバーがどういう気持ちだったのかは、私にはわかりません。しかし、明らかに不利だとわかっていても、彼らはみな真剣でした。

子供の心は、本当は柔軟で許容力の大きなものだと思います。学年が上がるにつれ彼と周囲の児童達との差が歴然と開いて行き、私達は一時、本当に6年間ここで過ごすことができるだろうかと不安でした。しかし、彼と彼の仲間達は、互いの関係の中から多くのことを学び、そんな心配の無意味さを逆に私達に教えてくれました。

私は彼の仲間達が、これからもこんな風に人がそれぞれみな「違う」ことを許容して、「分かり合う」ところから始められる人達でありつづけていて欲しいと願っています。そして、もしも自分が偏狭な価値観にさいなまれて息苦しくなった時には、彼のことを思い出して、彼と向き合っていた頃の自分の心にもう一度触れてみてくれるようなことがあれば嬉しいなあと思っています。